

デモクラティック・  
スクールを考える会 編



# 自分を 生かす 学校

いま芽吹く日本の  
デモクラティック・スクール

すべての学びは遊びの中に

異年齢ミックス

子ども達による学校運営

## ディープに民主主義

時間割・テストなし

せせらぎ出版

親・スタッフとともに学ぶ仲間

# 自分を 生きる 学校

デモクラティック・  
スクールを考える会 編

いま芽吹く日本のデモクラティック・スクール

せせらぎ出版



出版によせて

作家 本田 健

このたびは、『自分を生きる学校』の出版おめでとうございます。

本書にもあるように、日本にデモクラティック・スクールが、次々にできつつあることは、すばらしいと思っています。

私は、作家として、幸せで豊かな人の生き方をテーマに本を書いてきました。いろんな人をインタビューしていくうちに、幸せで、かつ豊かに生きている人は、「自分の大好きなこと」をおいかけているということに気づきました。

デモクラティック・スクールは、自分が何をやりたいのかについて、じっくり考えられる最高の環境のひとつだと思います。

私は、今10歳になる娘が生まれる前に、NHKの特集番組で、アメリカのデモクラティック・ス

クールであるサドベリーバレー校の存在を知りました。

その後、教育に興味を持つようになり、幼稚園は、長野にある「大地」という3000坪のりんご園の敷地にある素敵などところを見つけました。最初は、知り合いが誰もいない長野でしたが、4年近くの楽しい時間を過ごすことができました。それから、小学校を探し始めたとき、数年前に見たテレビ番組を思い出し、アメリカのボストンにあるサドベリーバレー校を訪ねました。

広大な敷地で200人近くの子ども達が、楽しく遊ぶ様子を見て、こういう学校で、自分が学べたら、どんなに楽しかっただろう!と思いました。1週間の体験入学をさせてもらって、子どもにとって、「ここはまさに天国だ!」と感じました。アメリカ、カナダで4つの学校を見学した娘も、サドベリーが「一番楽しそう!」と言ったので、ボストンに移住することにしました。

サドベリーに通う子ども達を身近に見ていますが、デモクラティック・スクールは、子どもの最高にすばらしいところをうまく引き出せていると感じます。点数をつけて、いかに自分ができていないかを教えるより、クリエイティブな遊びの中で、お互いの良いところを認め合う環境の方が、よほど本人の自信を育てるのではないかと私は思います。

日本でも、同じような考え方に基づいた学校があるのを知ったのは、アメリカに来てからです。サドベリーの創始者であるダニーさんから、日本にも、児島さん、黒田さんをはじめ、すばらしいリーダーがいると聞き、とても感動しました。

デモクラティック・スクールは、子ども達が、気まま勝手になにかできるというわけではなく、自

分のやりたいことを自分の頭で考え、それに責任を持つ場所です。

親が完全にコントロールできるわけではないので、親にとっても、挑戦でもあります。サドベリーバレー校入学時の面接で、代表のミムジーさんに最初に聞かれた言葉を私は、忘れることはないでしょう。

「あなたは、子どもを100%信頼していますか？」

デモクラティック・スクールは、子どもを通して、親自身が子どもの将来だけでなく、自分の人生を信頼することを学ぶスクールでもあるのです。

これから、日本でも、こういうスクールを作る動きがたくさん出てくるでしょう。みなさんの取り組みが、広がっていくのを楽しみにしています。

---

**本田 健**（ほんだ けん）

経営コンサルティング会社、ベンチャーキャピタル会社など、複数の会社を経営する「お金の専門家」。  
『幸せな小金持ちシリーズ』（「マフックス」）、『ユダヤ人大富豪の教え』（大和書房）、『きつと、よくなる』（サンマーク出版）など、著作シリーズの累計部数は200万部を超えている。

## はじめに

ここに、「時間割なし」「テストなし」「子ども達による学校運営」を行っている学校「デモクラティック・スクール」を紹介します。

既存きぞんの学校システムと比べると、一風変わった学校という印象を受けますが、現在の21世紀においては、とても自然で、とても理に適かなった、子ども達にとって「最高の学校」と言えます。

その誕生は今から40年前（1968年）にさかのぼります。

アメリカのマサチューセッツ州ボストン郊外こうがいに創つくられた「サドベリーバレー・スクール」です。

その学校の特徴とくちゆうは、当時のアメリカでも驚くものでした。カリキュラム・学年・テスト・成績・一斉授業いちせいじゆえい・職員室・校長といったものは一切ありません。なぜなら子どもの成長にとってそんなものは必要なかったからです。そして、学校運営（規則作り）、教師の雇用計画（人事権）、学校予算、

そのほか必要なことすべてを、子ども達が一票を投じて決めていくシステムを採用しました。

まさに、デモクラティックのゆえんです。

その後、サドベリーバレー・スクールは学校の誰もが平等な一票をもつ「民主主義の学校」という意味から「デモクラティック・スクール」と呼ばれるようになりました。

では、なぜこのような学びの場が誕生したのでしょうか。

当時、大学で物理学の教授だったダニエル・グリーンバーグ氏は既存の教育に疑問を抱いていました。というのは、彼が大学で教えている学生達の多くが好奇心や自尊心を失い、学ぶことをしなくなっていたからです。常に与えられることをこなしているだけ、させられているだけという学生達の状態を目の当たりにする日々を送っていました。

そして自分の幼い子ども達のための学校を探す中で、学びの原点に立ち返りました。

グリーンバーグ氏を含むサドベリーバレー・スクールの創設メンバーは、今までの学校の概念を一旦白紙に戻し、ゼロから「人はなぜ学ぶのか?」「学校とは何か?」を徹底的に論じあい、そして子どもが本来の意味で学んでいくことができる「新しい現在の学校」へと考えを深めていきました。

2年間かけて話しあった結果、「子どもは好奇心と向上心を生まれもち、自ら学んでいくことができる」「大人が強制せずとも、子どもはなりたいたい自分になるために自分に必要なものを学んでいく」という考えにたどり着きました。また、子どもの生まれもつ学びの力は時代の要請に適したものだ



もわかりました。

その後、その精神・理念は引き継がれ、現在ではヨーロッパ・中東・オセアニアなど世界9カ国、約50校のデモクラティック・スクールが存在し、様々な文化の中で結果を出しています。もともと「自分の意見をきっちり持ち、それを表現すること」は、集団の中で自分が幸せに生きるための重要なスキルであり、すべての文化のベースにあるものだからでしょう。

1997年、日本でも同じように学びの原点に立ち返ったところから、デモクラティック・スクールをつくろうという一歩が踏み出されました。そうして誕生した〈デモクラティック・スクール宙〉〈デモクラティック・スクール フリープレイスなわて〉〈デモクラティック・スクール まつくろくろすけ〉の3校が中心となり、2005年より月に1回「デモクラティック・スクールを考える会」を開いてきました。

デモクラティックな学びについて認識を深め、学びあうための勉強会、スクールの枠を超えての子ども・スタッフ・保護者同士の親睦<sup>しんぼく</sup>などが行われてきました。その中で2006年5月、3校の実践<sup>じっせん</sup>をまとめた本を出版しようという計画が生まれ、各スクールから立候補した子どもやスタッフが集まり編集委員会ができました。「自分達の実践をより多くの人に知ってもらいたい。子ども達を取り巻く閉塞感<sup>へいそくかん</sup>を少しでも打ち破りたい」との熱い思いから、定期的に集まり作業を進めてきました。委員で内容・構成を考え、一通りの原稿を揃えました。その後は多くの保護者・支援者から、初めて手に



取る人にもわかりやすいようにとアドバイスをもらいました。それをうけいろいろと改良していきました。子どもからの提案で、中学生・高校生にも読んでもらえるようにと、読みづらい漢字にルビをつけることになりました。写真を撮るのが好きな子や支援者には、雰囲気がよく伝わるようにとたくさん写真の写真を写してもらいました。このように多くの人達の協力と、そして一つひとつ話し合いを重ねながら、ついに本が完成しました。この歩み自体も、とてもデモクラティック・スクールらしいものだったと思います。

子どもの健やかな成長を願い自分達にあう教育を模索している親、既存の学校に満足がいかない子ども達、これから教育の道をめざす若者、いろんな方々にデモクラティック・スクールについて知ってもらいたいです。

本書では、日本でのデモクラティック・スクールの実践について、子ども・スタッフ・親の立場からの文章をまとめました。今年10周年を迎え、日本でも息づき始めたスクールの現状を感じていただけると思います。

では、21世紀を生きていく子ども達に最高の学校「デモクラティック・スクール」の秘密を、これからゆつくりと紹介していきましよう。

|        |   |
|--------|---|
| 出版によせて | 1 |
|--------|---|

|      |   |
|------|---|
| はじめに | 4 |
|------|---|

|                                        |    |
|----------------------------------------|----|
| 特別寄稿 本当の自分を生きる学校 なぜ、今、デモクラティック・スクールなのか | 13 |
|----------------------------------------|----|

グローバル・ビジョン代表 児島 一裕

義務教育は、すでに倒産している／教育の再生Ⅱ進化／デモクラティック・スクールへの軌跡／フリースクール in アメリカ／フリースクールとデモクラティック・スクールはどうか／デンマークの「生」の学校と「死」の学校／デモクラティック・スクールの未来（展望）／内なる平和を創造する学校／無限の可能性を秘めた学校

## 第1部

# デモクラティック・スクールへの道案内

【保護者座談会】

|                      |    |
|----------------------|----|
| 1 デモクラティック・スクールとの出会い | 35 |
|----------------------|----|

1 デモクラティック・スクールの日常

.....

70

第2部

デモクラティック・スクールへようこそ

69

自由の空気の中で育つ子ども達／自治の中で育つ責任について／スクールを基盤に広がる人、深い友人／親もいっしょにつくるデモクラティック・スクール／卒業生について／実社会に巣立ってから

3 デモクラティック・スクールで育つ子ども達

.....

57

80年代フリースクール誕生、そして21世紀デモクラティック・スクールへと／個人を尊重する社会へ／義務教育って誰のため？ 国の学校ではなく自分達のスタイルを／親と子の権利を取り戻そう／「学習障害」って本当に問題なの？／教育基本法って？

2 日本の教育をとりまくもの

.....

49

鈴木さんの場合／亀井さんの場合／後藤さんの場合／既存の学校に行きたくない子どもの気持ちをどううけとめる？／親の不安について／まわりの人達とはどうしてる？／既存の学校との関係／デモクラティック・スクールでの成長／家庭にももたらされる変化／日常的な親子の問題解決はどうしているの？

|                |                           |     |
|----------------|---------------------------|-----|
| ① 遊びからすべてが生まれる | 決められたカリキュラムがない            | 70  |
| ② 異年齢ミックス      | 大きい子・小さい子・誰もがみんないっしょに     | 74  |
| ③ お金           | お金の使い方を身をもって学ぶ            | 78  |
| ④ 学習           | テストなし・自分の興味から集中して学ぶ       | 80  |
| 2 ミーティング       |                           |     |
| ① ミーティング       | 誰もが納得できる案までとことん話しあう       | 84  |
| ② ルールの作り方      | 皆が対等にルール作りに参加できる          | 88  |
| ③ もめごとの解決      | 話しあって解決へ                  | 92  |
| ④ 総会           | 人事・予算・運営も、子ども・保護者を含めた話しあい | 96  |
| 3 特別活動         |                           |     |
| ① クラブ活動        | クラブはこうして生まれる              | 100 |
| ② 行事           | 自ら立案する企画を楽しむ              | 106 |
| ③ 卒業           | 自ら希望して卒業するメンバー達           | 110 |

第3部

学びあい育ちあう仲間

115

1 メンバーの声

.....

116

① メンバーへのアンケート結果

.....

116

② メンバーインタビュー

120

▼目標は「最善を選んで生きる人」に

児島 げんき

120

▼〈宙〉と比べられるところはどこにもない

荻 大介

128

▼ここに通うことになるとは思ってもみなかった

妹尾 愛里

132

③ 卒業生インタビュー

.....

142

▼楽しいと思ったことは大人まで自分の中に残る

今川 将大

142

▼尊重の中には自分でルールを敷く厳しさもある

児島 ひかる

149

▼この環境と人との出会いを一番求めていたとわかった

荻 貴文

154

2 スタッフの声

.....

161

① スタッフの仕事とは？

.....

161

② スタッフから見た「デモクラティック・スクール」……………164

【他者との関係】 自由の中では人は自分も他人も大切にする 佐々木 真佐恵 164

▼【集団・学力】 マニュアルを捨てる 寺本 優満子 169

▼【進路・社会性】 スクールの子ども達が日本の社会で活躍できる理由<sup>わけ</sup> 倉谷 明伸 174

サドベリーバレー・スクールからのメッセージ M・サドフスキー／D・グリーンバーグ 178

おわりに 黒田 喜美 182

巻末資料

▼日本で「デモクラティック・スクール」を紹介したもの（1994～2008）……………186

▼日本で活動している「デモクラティック・スクール」概要 189 〈宙〉〈フリープレイスなわて〉

〈まつくろくろすけ〉〈わあい〉〈湘南サドベリースクール〉……………194

▼「デモクラティック・スクール」協力団体概要……………194

〈グローバル・ビジョン〉〈G・H・B・センター〉

☐ 特別寄稿 ☐

児島 一裕 (こじま かずひろ)

1956年 兵庫県高砂市に生まれる。

1983年 アメリカのフリースクールと出会い、全米のオルタナティブ教育連盟委員となる。

1985年 高砂市にて、日本初の宿泊型フリースクール地球学校を開校（1999年閉校）。

同時に世界中のオルタナティブ教育の情報を発信する G・H・B・センター設立。

2000年 地球大学と出会う。世界中に、学びのネットワークを展開。

2005年 ライフ・ラーニングスペース、グローバル・ビジョンを開始。現在に至る。

# 本当の自分を生きる学校

なぜ、今、デモクラティック・スクールなのか

グローバル・ビジョン代表 児島 一裕

今、時代は本気で大きく変わろうとしています。

本当に信じられないような速さでそれは起きています。その変化は、まるで進化する生き物のようです。人類が生き残るための新陳代謝のような現象が至る所で今起きています。



教育界も然りです。今、なぜ、新たにデモクラティック・スクールが登場し始めたのでしょうか！それは、今までの教育システムとはまったくちがう、学ぶ側が主体的に学校の運営、自治に関わることのできる学びの場（本来の学校）が必要とされ始めたからだと思います。

## 義務教育は、すでに倒産している

この表現は過激と思われるかもしれませんが、元々、教育に義務などというものがあること事態、不自然であると言えるでしょう。

人はこの世に生まれたときから、学びを自然な状態で行なっているのです。大自然の営みとまったく同じなのだと思います。誰かに頼まれて学んでいるわけではありません。驚くことに赤ちゃんが産道から出てくる時も、自分の意志でこの広い世界に出てこようとしています。すべて自らの意志と決定により、体験を通して学んでいるのです。

しかしふしぎなことに、この国では6歳になると「学校」と呼ばれる所に行くことになっていきます。もちろん、これは正しくはありません。法律的にもです。念のため、わが国の憲法（日本国憲法）の第二十六条と教育基本法第四条を記しておきます。

**憲法第二十六条【教育を受ける権利、義務教育】**

- すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。
- すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負う。義務教育は、これを無償とする。

**教育基本法第四条【教育の機会均等】**

- すべて国民は、ひとしく、その能力に応じた教育を受ける機会を与えられなければならない。人種、信条、性別、社会的身分、経済的地位又は門地によって、教育上差別されない。

法律は、人間が自分達の都合に基づいて作ったものですが、それでもどこにも「学校に行かせよ」とは書かれてはいません。自分の子どもにあった教育を受けさせる義務があると書かれています。つまり、教育は自分達で選択できるのです。もちろん、国が用意してくれた「学校」と呼ばれる所に行くのも選択肢の一つです。

今、教育界で起きているさまざまな問題は、かなり根が深いと思います。それは、「国家」が生み出している「公害」と言っても過言ではありません。学校という本来の役割が、教育の本質から、かけ離れてしまっているのです。

子ども達は本来学ぶことが大好きです。自ら気づくことの喜び、その喜びが次への原動力になるから

です。つまり、本来学ぶという行為は、自分の幸せに繋がっているはずです。だからこそ、自ずと学びたくなってくるのです。学び続けながら、子ども達は希望に満ちた日々を送っているはずなのです。ところが今はそういう状況ではありません。学校の中も外も揺れています。当然、子ども達の心の中も揺れているでしょう。

何がそれを生んでいるのでしょうか！ 学校は、まるで国の教育工場のように、子どもを点数化し、評価してきました。今もそれは続けられていると思います。その行為はまるで選別機械のように、人間を区別（時には差別）しているように映ります。実際にそのように機能してしまっています。このような機械マシンを意図的に作りあげたのは明治維新の国家です（明治5年、学校令発布）。科目というのも、実は、その主要な学科の中に国が必要とする人材を選別できる仕掛けが備わっています。それをテストで計り、選び出すわけです。

その流れは、今もほとんど手つかずで、本質的には変わっていないでしょう。学校造りに携わった人々は、自分達のためのさまざまな特権を生み、それを拡大化し、最終的には、昭和15年〜16年に当時の文部省は、教育をひとまとめにして、財界、産業界に売り渡してしまったのです。その頃から学区制やさまざまなテスト、偏差値、入試制度なるものが始まったのです。長い長い間、この制度（テスト、成績、評価）によって本当に多くの子ども達、教師までもが振り回されてきたのです。

今、確立した教育行政の秩序の中で、学校教育を通して国が減じようとしているのです。また学校教育を通して子ども達の人間性破壊は進行してきていると感じます。教育は、ぎりぎりの崖っぷちに

立っていると思います。もう飛ばざるを得ない状況下にあるようです。言い換えれば、だからこそ、新しい世界に向かって「飛ぶ」ことができるとも言えます。

今大切なことは、自分の時間をいかに使って学び、目標を設定し、自分を磨き、世界に羽ばたいていくか、自分を試してみるか、チャレンジしていくかということです。

そのためには、自分のための自由な時間がなくては不可能と言えるでしょう。自分を思いっきり解き放つ、自由な時間こそが人生のカギなのです。

## 教育の再生Ⅱ進化

われわれ民衆は、文部科学省（当時、文部省）によって本来の「教育」を取りあげられましたが、主権者であることをやめたわけではありません。われわれは今こそ、自分達の手で教育を何とかしなくてはならない時に来ています。

制度に縛られて死んだようになって今の教育システムを、われわれ民衆の意志の力と勇気と行動力で息を吹き返すようにしていく必要があります。未来の子ども達のためにもです。

1960年代、世界中で教育に対する進化的な目覚め（動き）が起きました。それは主に、「フリースクール」「オルタナティブ」と呼ばれています。その波は日本にも届き、1983年、日本で

もフリースクールの動きが始まったのです。

そのきっかけになったのが、『教育に強制はいらない』（二光社）という一冊の本でした。

1985年以来、さまざまな学びのスペースが誕生し、今では1000校以上もの、ユニークで個性あふれる学校（塾）がこの日本に誕生し、存在しています。

## デモクラティック・スクールへの軌跡<sup>きせき</sup>

ここで少しですが、自己紹介を含め、今までやってきたことなど、お伝えしておきたいと思います。

ボクは、日本でもっとも初期の登校拒否児でした。きっかけは小学5年生の時の給食で出された「茹でたまご」。それを無理やり食べさせられることへの恐怖から、給食時間への恐怖、そして登校することへの恐怖が生まれ、そしてついには布団から出られない状態になっていきました。そして、ありとあらゆる検査（脳波も含め）をするために、当時の児童相談所に入所。約1カ月半そこで過ごし、次に大阪にある児童院という情緒障害短期治療施設へ入所。

そこで、ボクは本来の自分を取り戻すことになりました。2年間弱、そこで生活したことになります。今思えば、そこがボクの「フリースクール」だったのです。つまり、自分の居場所だったわけですね。そこででは自分の思ったことをとことんさせてもらえました。もちろん、まちがったことをすると

叱られます。時には手も出しました。しかし、なぜかその場所が大好きでした。それは職員との関係性だったと思います。「信頼関係」と呼んでもいいでしょう。お互いに言いたいことを、言いあつて暮らしていました。そこにきつと何か大切なものがあつたのでしょうか。それは自己表現の「自由」だったかもしれません。

のちに、ボクはアメリカ（カリフォルニア）に渡り、レストランの修行に入り、シェフになり、今からレストラン業を本格的に……という時、なんと出社拒否に陥おとりました。自分で選んでいたにも関わらず、なぜか、「本当にこれでいいのだろうか」と日々悩み、苦しみ続けました。

そんなある日、なぜか夢の中に子どもの手首が出てきたのです。それは6日間続きました。その手首は、児童院の子の手首だったのです。その夢を見終わると、無性に子どもと遊びたくなりました。そして紙芝居を作りアメリカ中見せてまわりました。そのことが縁で、なんと日本語学校の教師になり、そこで初めて教育との接点が生まれました。

その日本語学校での子ども達との関わりから、教育への疑問が湧いてきたのです。それは子ども自身が活き活き学んでいないと感じたからです。まるでロボットのように、操り人形のように思えました。言われたことを、どこまで正確に暗記し、マネできるか……。そこを去る時、子ども達と約束したのです。「今度会うときは、いつしよに学校をやろうねー」と。その後、学校として使える場所を探している時、アメリカのフリースクールと出会いました。その子ども達の目はキラキラし、活き活きとありのままの自分を表現している姿に共感・感動し、これこそがボクの人生！と直観。そして

全米のオルタナティブ教育連盟の委員にもなりました。

2年後の1985年秋、日本に帰って、故郷の高砂で、フリースクール「地球学校」を開校、以後1999年まで活動してきました。1985年から地球学校と同時に、旅を学びの場にした「旅の学校」というプログラムも行なっていました。また、世界中のオルタナティブ教育の情報を集め、発信できる情報センター（G・H・B・センター）を1988年に開設し、現在に至ります。

1999年以降、活動の輪が広がり、世界中のさまざまな人々、フリースクール、デモクラティック・スクール、コミュニティ、ネイティブの人々と繋がりがあって共同イベントやワークショップを企画。また、世界中で国際交流イベントやプロジェクトを開催したり、海外からのゲスト招請しょうせいも行なっています。国内では、デモクラティック・スクール設立、スタッフ養成プログラムにも関わっています。

このことだけはハッキリと信念を持ってお伝えできます。自分の好きなこと（情熱を注げること）をしていれば、必ずその輪が広がり仲間（家族）が増えて、幸せになっていきます。そしてその幸せを分かちあっていけば、みんなが幸せになれるということです。

## フリースクール in アメリカ

よく使われている「フリースクール」という言葉は、本来「国家からの『自由』」という意味でヨーロッパを中心に用いられていました。それがアメリカに渡り、アメリカで自由に対する誤解を招いたため、「オルタナティブ・スクール」と改名して1980年代以降、意図的に用いられるようになりました。

アメリカでは、1960年代後半から80年代、特に教育の荒廃が進んでいきました。当時の教育システムはかなり重症だったと記憶しています。そんな状況を打開しようと、まず親達自身が新しい学びの場を創設していきました。その後、州政府、市の行政も民間と手を組みはじめ新しい学びのシステムやプログラムを次々に生んでいったのです。

当時の親達の意志と意識が、新しい学び場を誕生させ、その流れから地域での公立のオルタナティブ・スクールをスタートさせ、大成功を収めるに至ったのです。今やどこの公立のオルタナティブ・スクールも入学待ち状態が続いています。実は、型にはまらないユニークな教師にとっても、こういった学校はやりがいのある職場になっているのです。

ほんの一例ですが、1970年代後半、ニューヨーク州で生まれた、公立のオルタナティブ・スクール「シティー・アズ・スクール（街が学校）」も全米に広がり成功を収めています。学生は街に出て、実際に学び、単位を取り卒業できます。公立なので、基本的には無料です。学生数は1200人。このシステムは20州以上に及んでいます。

公立のオルタナティブ・スクールでは、州の規則はあるものの、ミーティングを通し、学生も教師



もお互いによりき学校創造者として歩んでいます。

また、ごぞんじの方も多いかと思いますが、チャーター・スクールというシステムも同じように、当時の解決策の一つとして、登場してきました。アメリカでは、よい悪いは別にして、新しい試みに対するチャレンジ精神が旺盛です。国民性と言われるかもしれませんが、実に多様性に富んでいます。ボクは、この日本でも、公立のオルタナティブな学びの場が登場するチャンスはあると思います。それは本当に可能です。ただし、本気で親と教師と子ども達が連帯して、自分達が理想とする教育の本質を問わなくてはなりません。原点（白紙）から問い直す必要があります。決心されれば、新たな流れは必ず生まれてくると思います。

## フリースクールとデモクラティック・スクールはどうちがうのか

さて日本の場合、このデモクラティック・スクールのはたす役割は、今後、多岐に渡り拡大していくことは確実でしょう。また教育に対する「親権」を取り戻し、自分達の教育を自分達の意志と力で再生できる可能性を、最大限発揮させてくれるでしょう。

元々、われわれは国が行なっている教育システムを「学校」と呼んでいました。そしてそこから外

れると、不登校（昔は、登校拒否）と呼ばれています。その言葉は否定的（ネガティブ）なもので、まるでその子に問題があるかのような錯覚を与えます。

しかも義務教育という名の鎖で、その子の学びの自由（時間）を奪っているのです。したいことがある子にとっては、まるで強制収容所にでも入れられているかのようなのです。つまり自由に外に出て、旅をしたり、出会ったりできないのです。今を生きていない状態にされてしまうのです。

親に対しても、子どもが学校に行かないと、まるで悪いことでもしているかのようにプレッシャーを与えたりします。先生によつては、脅す場合すらあるようです。今までの古い20世紀型の教育をさされてきた親達は、罪悪感に苛まれてしまふのです。なぜ、病気以外で学校を休めないのでしょうか。

デモクラティック・スクールでの活動は、親も子も本来の自由な姿に立ち返らせてくれるでしょう。なぜなら自分達の時間が返されるからです。必要のないことで怒鳴ったり、急かしたりすることがなくなるからです。「しなくてはならない」という強迫観念が消えてしまうからです。その分ありのままの自分を受け容れ、自分の学びたいことをとことん追求していけるのです。それは親も同じです。今まで以上に大切な会話（コミュニケーション）の時間が持てるのです。このコミュニケーションシヨン力こそ、人生でもっとも基本的、かつ大事な道具となり得るでしょう。

また本音で語りあえる仲間や協力者がいるというのは、とても心強く、励みとなるのです。この学びの共同体は、ある意味、〃学びの家族〃とも言えるでしょう。家族は支えあいます。

よく「フリースクールとデモクラティック・スクールとは、どちらがうのですか？」と聞かれます。こ

の点、以前にサドベリー・バレー・スクール創設者のお一人、ダニエル・グリーンバーグ氏にたずねたことがあります。彼の考えでは

- ① 誰が学校の経済（運営）を握っているか——すべての子どもとスタッフ。
- ② 誰が人事権を握っているか——すべての子どもとスタッフ。
- ③ クラス（授業）があるかどうか——基本的にはありません（\*ただし、子どもからの要請があり、条件があれば行います）。

デモクラティック・スクールは、これらの点がはっきりしています。大人の誘導や権威が一切通用しないのです。大人がさせることはできない所なのです。人に教育されることもありません。また他人を強制することはありません。自分の学びがあるだけなのです。常に自分自身の成長の場なのです。

学校の中でデモクラティックな空気（雰囲気）を維持するためには、すべてをオープンにする必要があります。特定の者だけが知っている事柄というものは何一つありません。隠しごとは一切ないのです。見方を変えれば、この学校は信頼関係によって、運営されているとも言えます。いずれにしても、学びは自分のためにあるもので、誰かに指示されてするものではないということです。

今ではインターネットという、すばらしい世界との架け橋（窓口）があります。極端に言えば、必要なことはほとんど自分で学べるのです。よいストレスを溜め<sup>た</sup>ることもありません。彼らにはそれを使いこなせる時間と技が、確実に備わっています。わからなければ、すぐにわかる人にたずねま

す。自分のリズムで、自分なりの方法で獲得していくのです。そして自然に社会との接点を持つようになり、現実社会の中で自分を活かしていく術を学んでいきます。

## デンマークの「生の学校」と「死の学校」

この世界には、驚くような学校がまだまだあります。

以前訪れたデンマークの民衆学校「フアルケホイスコーレ」は、ボクにとって一生忘れられない出会いと気づきを与えてくれました。

デンマークの教育の根底には、競争原理というものがありません。争って勝ち取る、一位になる、比べる、といったシステムではありません。そして小学校では、子どもに点数をつけることを禁じています。ここでは、そのエキスのみ紹介しておきます。

### ①「生きた言葉」による「対話」

これは簡単に言えば、「おしゃべり」です。「本当に自分の思うことを、話したい人と話す」のです。実は、これこそがもともと頭の働きを活発にする方法なのです。そして自分に必要な情報を得る方法なのです。まさに「対話」による、意志（意思）のキャッチボールです。大脳生理学の脳のメカニズムでも知られています。好きなことに没頭している時、信じられないような集中力、理解力、

学習力、コミュニケーション力を生み出します。子ども達は、それを日々使って自分の世界を広げ、成長しています。

このプロセスこそ、人生でもっとも必要な道具だと言えます。そして誰にでも平等に備わっている能力なのです。好きなことの中身は、それぞれにちがいます。そのちがいが素晴らしい個性を発揮させ、融合させてくれるのです。

## ② 試験や資格がない

本来、人間に備わっている能力を数字では計れませんし、限定もできません。つまり、人間には無限の可能性が秘められているということです。そして、そのチャンスがいつ現れるか、誰にも予知することはできません。

## ③ 今を生きている

無意味な暗記や試験、詰め込み教育を施している国家（既成<sup>きせい</sup>）の学校を「死の学校」と呼んでいます。それは本人にとって、今という瞬間に必要とされない情報（知識など）をいやいや取り込んでしまつと、中で萎<sup>な</sup>えて腐<sup>くさ</sup>ってしまうからです。つまり死に至らしめてしまうのです。逆に、自分の中の「生<sup>いき</sup>」を促すような情報は、活き活きして、より活発に学ぼうとする原動力になるのです。それは、今という瞬間にしか手にすることのできない大切な栄養なのです。

さらに次の点は、デンマークの教育とは少し異なりますが、デモクラティック・スクールでは重要なことだと言えます。

④ カリキュラムがない

どこまでも本人の好奇心、関心事を基本にしているからです。つまり、学びの主人公は、常に「自分」だということです。常に学び続けていけるのです。そして、いつしか必ず専門の道へと進み、自分の天職へと繋が<sup>つな</sup>がっていきます。

デモクラティック・スクールの未来（展望）

おそらく今後、国の行なっている学校と呼ばれている場所は、かなり変化を遂げると思います。元々、教育は民衆のものでした。つまり、必要なものは自分達で作り、伝承していたのです。そこには本来の自治が存在していたと思います。自分の中の自治（＝自律）、家庭の中の自治、村（地域）の中の自治。それらが、国によって徐々に奪い取られていったために、今のような教育界（それ以外の分野でも）における悲劇を生んだと言えるでしょう。

今こそ、自分達の学校、自分達の地域（村）、自分達の社会を創造する時機に來ていると言えるでしょう。子ども達とともに、新しい世界を創造するチャンスが到来したのだと思います。

あと5年もすれば、国の規制から自由になった学びの場が、かなりの数増えていると思われます。そんな時（今もこれからかもしれません）、本人や親の不安は、ちゃんと職業に就けるかどうか、つま

り、「就職」です。

実は、自分を生きている人には、まったく問題がありません。本当の自分を生きていると、生き活きしています。その生き活きたエネルギー（活力）は、必要な人や仲間、仕事を呼び寄せるのです。何を隠そう、今これを書いている本人が、その生き証人だからです。

どんな人も、この世界に生まれたと同時に、天職の種を内在していると思います。その種は、さまざまな出会いによって、刺激によって、体験によって、育っていきます。自分の内なる自然を壊されなければ、自分の自由な世界を歪められなければ、自然に「それ」は育っていきけるのです。歓び、悲しみ、苦しみ、そしてさまざまなチャレンジとともに、人生を自分らしく磨き、成長していけるのです。それは本当の自分が一番よく知っていることなのです。自然に自分の内側から湧き上がってくるものなのです。

種は、光に向かって伸びていきます。その光とは、希望であり夢であり、自分らしさだと思います。それを奪わない、壊さない環境を創っていくことが、これからの豊かな子どもの未来を確実に生み育てる条件だと思えます。

デモクラティック・スクールにおいて、学びの主人公以外は、すべてがその環境の一部でしかありません。その環境で、何を学び、何を表現し、どんな自分になっていくのか、すべては自由です。必ず、花は咲くでしょう。木なら実もつけるでしょう。それらはまた社会へのギフト（贈り物）として、多くの人の役に立つでしょう。大げさに言えば、人類の進化に貢献しているのです。

## 内なる平和を創造する学校

デモクラティックというのは、民主的という意味です。それは読んで字のごとく、民（みんな）が主体的に物事に取り組み、解決したり、生み出し、創造・想像していくということです。勝手に誰かが、知らない間に決めているということはありません。つまり、プロセスをもっとも大事にする、学びの場とも言えるのです。

このような環境で育っていく子ども（人間）は、いつも自然に、デモクラティックな空気をまわりに提供していると考えられます。実際に会ってみられたら、おわかりになると思います。彼ら自身の内側が、平和な空気で満たされているから、外にもそれが放出されていくのです。

平和と言いながら争っている人達。それではいつまでたっても真の平和はやって来ないでしょう。真の平和は、個人の心の中から、そして家庭の中から始まっていくものだと思います。

日々、自分のしたいことをやり続けることができれば、当然のごとく「自信」、つまり自分を信じる力は養われます。それを人と共有すれば、ますますその力は育っていくことでしょう。

自分を信じ、相手を信じ、そして仲間を信じて、自分の夢を実現できるというのは、本当に幸せなことです。今われわれに必要なのは、幸せな自己（自分）だと言えるでしょう。



## 無限の可能性を秘めた学校

ボクは、デモクラティック・スクールと出会う前、アメリカにおいてフリースクールと出会いました。そしてこの日本でこそフリースクールを開校する意義があると決心し、実現させました。

しかし、当初残念なことに、フリースクールは学校に行けない子の居場所、「問題児」のたまり場、公立学校の補完的な場として捉えられ、報道されていきました。ボクがいくら力説しても、本来のフリースクールの姿（本質）は、この社会に登場しませんでした。

しかし、今新たなチャンスがやって来ました。それは自分にあつた学校を選択する家族が現れたからです。本気で自分の学べる場所を求める子ども達が登場して来たからです。彼らは、問題児でも病气でもありません。ピンピンしています。活き活きしています。だからこそ、自分らしく生きていきたいのです。自分を曲げずに、失わずに、ありのままで生きたいのです。

まず、自分を知る、そして自分を生きる。そのために、地球上すべてが学びの場、つまり「地球が学校」という考えが浮かんできたのです。そして、人生そのものが同じく学びの場となり得るです。自分を取り囲んでいる人は、必要とあらば、みな先生になり得ます。また逆もあり得ます。

一人の子どもの中に内在している可能性は、無限だと思えます。どのような可能性を秘めているか、誰も知り得ないのです。それが姿を現すまでは。その種が発芽し、新鮮な空気と水を得て、成長

するまでは。新鮮な空気、水とは、「ワクワクする出会い」とおき換えられるでしょう。

今まで世界中に登場してきた偉人達（もちろん、そう呼ばれない人も含め）は、みな例外なく、自分の好奇心、関心事に没頭し、その途上で運命的な人に出会い、刺激を受け、自分の夢を実現させてきたのです。その出会いから次へのステップ（ヒラメキ）を、確実に掴んでいったのです。

チャンス等待ってはいられないのです。今という瞬間に、突然現れるからです。子ども達は、常に直観で生きています。理由など、その時、わからないのです。

彼らは社会の中でも、さまざまな出会いによって、自分の人生をクリエイトしていくことでしょう。自分が選んだすべての教材やレッスン（失敗も含め）から、どんどん成長を遂げていくはずです。時代は確実に脱皮し、変化し、成長を遂げています。その変化の波に乗る、勇氣とチャレンジ精神、原動力は、自由という環境の中にこそ内在していると思います。そして子ども達は無限の可能性を秘めて、この世界に存在しています。子どもは未来であり、その架け橋でもあります。未来は、限定されていません。無限の可能性に満ち満ちているはずです。デモクラティック・スクールは、無限の可能性という世界へ通ずるトンネルなのです。子ども達はそのトンネルを通じて「天職」という、本当の自分の仕事にたどりつくことでしょう。一人ひとりが天職を生きる時、世界は喜びと平和に満ち満ちた空気で包まれることでしょう。



第1部

デモクラティック・  
スクール  
への  
道案内



## 保護者 座談会

2006年3月18日・19日 於…光円寺（兵庫県神崎郡市川町）

### 出席者

#### ◎佐々木 真佐恵

〈デモクラティック・スクール まつくろくろすけ〉保護者  
3児の母／20歳男子・17歳女子・11歳女子  
職業／〈まつくろくろすけ〉スタッフ

#### ◎後藤 明照

〈まつくろくろすけ〉保護者  
2児の父／18歳男子・11歳男子  
職業／寺院住職

#### ◎後藤 由美子

〈まつくろくろすけ〉保護者  
職業／寺院坊守・社会福祉法人理事長

#### ◎児島 一裕

〈まつくろくろすけ〉保護者  
4児の父／18歳男子・17歳女子・15歳女子・12歳男子  
職業／G・H・B・センター主宰者

#### ◎鈴木 康子

〈デモクラティック・スクール 宙〉保護者  
2児の母／12歳男子・9歳男子

#### ◎萩 秀典

〈宙〉保護者  
2児の父／17歳男子・12歳男子  
職業／会社員

#### ◎萩 育子

〈宙〉保護者  
職業／介護職

#### ◎亀井 佳子

〈デモクラティック・スクール フリープレスなわて〉保護者  
3児の母／20歳男子・17歳男子・17歳男子  
職業／介護職

### 司会

#### ◎黒田 喜美

〈デモクラティック・スクール まつくろくろすけ〉スタッフ

# 1

## デモクラティック・スクールとの出会い

出席者 鈴木・亀井・後藤（明）・後藤（由）・佐々木

### 鈴木さんの場合

司会 では、それぞれ、お子さんをデモクラティック・スクールに入学させたきっかけからお話ください。

鈴木 息子が2人います。〈宙<sup>そら</sup>〉に行くまでデモクラティック・スクールのことも、サドベリーバレー・スクールのことも知りませんでした。「デモクラティックⅡ民主主義」とばつと浮かんでも、それがどんなスクールなのかイメージがわかりませんでした。

最初は近所の学校に通っていました。私には子ども

達が無理をしながら行っているように見え心配でした。元気がない時もありました。学校にはいろんな粹がある。それでもものびのびしている子もいましたが、うちの子どもはそうではありませんでした。でも、私はそんな子どもたちの状況に対してどうしていいかわからず不安でした。

そうするうちに下の子が小学校4年生の5月から学校に行かなくなり、家にずっといるようになりました。家にずっといるのもどうかなあと感じて、私がインターネットでいろいろと調べました。その中で見つけた〈宙〉のホームページの内容がとてもよかったのです。ルビも打ってあり、息子と二人で読んでみまし

た。息子も「ここいいかもしれない」となり、早速見学に行きました。10日間の体験参加の期間中に本人はもう入学することに決めていました。「自由で束縛がないのがなによりいい」と。

それから2週間くらいたった時、中学1年生の上の子が「俺も行ってみようかな」と言い出しました。それまでは上の子はがんばって中学へ通っていましたが、彼も見学に行くと、すぐに〈宙〉に行くことに決めました。

司会 〈宙〉に通うようになって何か変化がありましたか？

鈴木 二人ともしっかりとしてきました。今は対等に私に対して意見も言います。「おかあさん、まちがっている」と言ってきたり、批判をしたりします。私も言われて「確かにそうだなあ」と納得することもあります。親もそれを正面から受けとっています。

デモクラティック・スクールとは「自分をしっかりとる場所」と思います。既存きぞんの学校では自分をもちたいけどもてなかった。〈宙〉では自由の中で自分が選んでいき、自分でいろいろ試みて、自分を感じる

ことができる。学校では決まっていることが多くて、選択の余地がなかったと思います。今は自分で何が必要か選ぶようになったので、見ていて私も安心ですね。

## 亀井さんの場合

亀井 うちの息子は20歳です。〈なわて〉に行き始めたのは18歳なので、今2年目です。

高校1年生の2学期の途中から不登校になりました。担任の先生が「学校に來い來い」というのではなくて、「どうしてる？ 何か希望がある？」という感じでよく家に来てくださっていました。その先生が不登校の子どもを持つお母さんを紹介してくださいました。私がどこか通えるフリースクールを探していると、そのお母さんが〈なわて〉を教えてくださいました。

うちからわりと近いので見学に行きました。

うちの子は人前で話せない。対人恐怖というわけではないですが、高校生の頃から苦手になりました。その当時、〈なわて〉は生徒は数人だったのですが、それでも本人が行くつて言うまで時間がかりました。

〈なわて〉では誰も話しかけてくれない。自分から働きかけていかなければならない。うちの子は自分からは人に話せないから、〈なわて〉に行つてみた。それで、誰かが話しかけてくれるのを待っている。すると、ぼつんと一日中座っていることになる。よけいに疲れに行っているようなものだとは本人は感じていました。それでそのうちに行けなくなつた。そのことを本人が〈なわて〉スタッフ（スタッフ——161頁を参照）に言うと、スタッフは「自分は人に気を遣われるのがいやだから、話しかけなかった。でも、話したいのなら」と、息子に話しかけてくれるようになりました。それでもやっぱりしんどくて、7ヵ月ぐらい休み、その後通うようになりました。

またしばらく休んでいた時期もありますが、1ヵ月ほど前から再び行くようになりました。息子の気持ちも「〈なわて〉をデモクラティック・スクールとして

充実させていきたい」と少し変わってきてるようで、少しずつ元気になってきています。

司会 既存の学校ではどんな感じでしたか？

亀井 幼稚園から中学校までは普通に通っていました。成績についてはそんなに悪くないので、何も言われませんでした。けれども先生によく言われたのは「外で元気に遊びなさい。もつと積極的に発言しなさい」などです。それで、子どもは「自分に自信がもてなくなつた」と言っています。できないことばかりやれやれと言われて、できる面を引っ張つて伸ばしてもらうということがなく、しんどかつたようです。学校がもつ子どもの理想像は「明るく元気な子」ではないでしょうか？ 息子はまったく当てはまつてなかった。それで、「僕はずっと否定され続けきた」と思いが募つたようですね。

司会 〈なわて〉に通うようになって変化はありましたか？

亀井 ええ、ありました。だから家の中にこもっていた時より今はいいかなと思っています。「それじゃあ、今までが悪かつたみたいやなあ」と本人に言われたり



しますけど。でも前より元気になってきました。家で長いことゲームばかりしていた時期もありました。それにもあきて「家ですることがない」と言い続けて、むなく過ごしていた頃とちがって、今は外に出かけています。

私にしたら子どもが外に出てくれる、少しずつ人とかかわりが増えてくれるとうれしいです。親の勝手な考えかもしれないけど……。でも、今はこのまま見守りたい。期待というのは親の身勝手なのでなるべくしないように心がけています。

## 後藤さんの場合

後藤（由） 息子が二人います。上の子が小学校2年生終り頃から、「学校は砂漠だ」ともらしたり、微熱を出したり、「腕が痛い」とか言い出しました。3年生になると学校の時間が長くなりがまんできなくなっただけでしょう。学校に行きたくない子がよく病気に

なったりするのも、そうならないと休むことが許されないからではないでしょうか。

学校は建前としては個性とか主体性を否定していません。でも現状は学校で主体性を持つのはとてもむずかしい。そういうことも絡んで学校ではいっぱい問題が起きている。実際、息子が2年間学校の中にいて、いじめの芽だとかいろんな形で子どもの問題を目の当たりにしてきました。うちだけじゃなくて近所の子とも達もそうでした。

学校は問題をそのままにした状態でずつとあるのに、私は無理に子どもを行かせようとしていたと知らされました。とにかく子どもが「行きたくない」と言っているのだから、「これはもう無理して行かせることはない」と情報を探しました。

雑誌でフリースクール「地球学校」をしている児島さんのことを読み、見学に行きました。遠くて入らなかったのですが、息子とはかく小学校はいやだから、「地球学校に転校する」と同級生に言っただけで辞めました。そうすると移行しやすかったのです。

学校を辞める時、私は地域から外れるような寂しさ

がありました。けれど、1週間ぐらいでその不安は消えました。鈴木さんと同じで、学校に行っている間よりも、それ以降のほうが安心していられるという状態になりました。

児島さんの息子さんと同年齢だったので、いっしょに育っていくことになりました。家庭で育っていけばいいという意識で、児島さんが呼びかけていた「遊び場」という集まりに週に2度ほど参加して、そこで息子は朝から晩まで遊びまくっていました。おつきあいの中で児島さんが具体的に子どもの主体性を大事にしているやりとりを見て、私も多くを学びました。

その「遊び場」へ黒田喜美さん（後の〈まっくろくろすけ〉代表）がかかわってくれることになりました。1年くらいしてから、彼女が「サドベリーのような場をつくろう」と呼びかけた。子どもの主体性を大事に思うから、親のほうから入ったと言わなかったけれど、本人が「行きたい」と言い出し通い始めました。

後藤（明） 6年生の時に「卒業式だけは行く」ということになって、私も見に行きました。学校の先生が

制服を貸してくれたりして、ぶっつけ本番で証書をもらっていました。

中学校はまったく行かないで、〈まっくろくろすけ〉にずっと参加していました。3年生の夏ごろ、〈まっくろくろすけ〉に行っている同じ年の子が夜間高校に行くと決めた。その話に彼ものった。のったはいけれど入試がある。彼ら二人で相談して放課後に中学校に勉強を教えてもらいに行き、入試に合格し、高校に進んでいます。

司会 入学試験の勉強はどうでしたか？

後藤（明） 中学の卒業証書をもらいに行った時に校長と勉強を教えてくれた先生と話す機会がありました。「二人ともとてものみこみが早かった」とその先生がびっくりされていた。教科別の学習はそれまで全然してこなかった。でも、本人が学びたくて勉強するのだから、覚えるのも早い。本人のもつ力がものすごく発揮され、まったく知らないことでもすごいスピードで学んでいった。先生も教えがいがあったと喜んでくれた。

「やりたい時、やる必要を本人が感じた時から始め

れば、短時間に集中して学ぶ」ということを先生も親も理解すれば、学習への不安はなくなるのではないでしょうか。

今、この春から定時制高校4年生。演劇に打ち込んでいます。息子の将来について私にも全然不安がありません。自分の力で生きていくでしょう。

下の子は学校にはまったく縁がない。4歳になると、すぐに「まっくろくろすけ」に入りました。上の子が行っていたので、下の子も3歳の頃から「早く4歳になって自分も行きたい」と楽しみにしていました。5歳のとき本人は関心がなかったんですが、こちらが「一度どんなどころか行ってみよう」と話して幼稚園に行ってみました。でも、本人にはあまりおもしろいところじゃなかった。私もいつしよに行ったことがあるけど、たとえば、遊びが盛りあがっている時に、いきなりみんなお遊戯たんのうしましうとかやり始める。それでは、子どもは遊びを堪能たんのうできないと思う。それで2週間くらいでやめて、それからは小学校へは一度も行かずに、ずっと「まっくろくろすけ」だけに参加しています。

後藤（由）　こんなふうに上と下では経験も性格もちがいます。上の子は学校でしんどかったし、しばらく空気がへこんだようなイメージを自分に対して持っていたみたいです。学校から離れて何ヵ月か経ち、空気がいっぱい入った状態になったようです。下の子は上のおかげで親が勉強してすんなり大きくなった。

2人とも生まれつき持っているものが損そとなわれずにすんでいる感じがします。

### 既存の学校に行きたくない子どもの気持ちをどううけとめる？

司会　では、まず既存の学校とのかについてお話ください。

鈴木　後藤さんのお母さんのお話でとても大切だと思った所は「行きたくないという気持ちをサポートしなくては」と言われたところです。行きたくないのを、どうしても何とか行かせようとする親が多いので

はないでしょうか。子どもの行きたくない気持ちを支えてあげようと親が思えたら、親も子も楽になるのでは？ でも、どうしたらそんなふうに思えるようになるのでしょうか？

後藤（由） 学校の先生ともじっくり話しました。うちはお寺なので、子ども達をここに集めていろいろしていました。それで、地域の子ども達との関係も見え、子ども達もすごく問題を抱えているとわかりました。もちろん、「その原因Ⅱ学校」ではないけれども、親が「とにかく学校には行きなさい」では、子どもをすごくゆがめていくことになりますね。

基本的には親の願いと子どもの願いは、そんなにちがわない。親は子どもに幸せになってほしい。でも間に学校とか成績とかそういう「障害物」が入って親子の関係が悪くなる。それがすごく変ですね。幸せになるためには学校でうまくやれなければならないというのを疑わないから、我が子に問題があるような気持ちになるのではないのでしょうか。そうして、子どもは自分を否定するし、親も自分を否定する。でも、学校がすべて本当に正しいわけじゃないですね。ひとつの



やり方だから。それがあう人もいればあわない人もいる。

ちよつと離れてみればそれがあうかあわないか、あわないことをいかに無理にやろうとしているかが見える。あわないならその子にとってどうすることが一番かを見ることが大切です。見ようとしない、見たくないっていう部分も正直あつたし、勇気もいった。でも、親がそのことを見ないまままでその子が大人になつて、もつといろんな苦しみを抱えさせているということともあると思います。

親が動いて、ちがう生き方をしている人に出会うことが私の理解を深めるのにとても大きかったんです。そうして、親の意識が変わると、子ども達も縛りがとれて、自分に必要な出会いをしていきました。家庭を基盤とするホームスクーリングという育ち方を知り、そのネットワークの中で子ども同士が知りあい、輪が広がっていった。〈まっくろくろすけ〉が専用の場を持って、各地から、親が生き方を変えするというような形で引越してこられ、近くに集まってきました。

## 親の不安について

司会 佐々木さんは鳥取から〈まっくろくろすけ〉のある市川町に引越して来たのですね。

佐々木 ええ、当時は鳥取にはフリースクールもなく、ほかに選ぶこともできなかった。息子は自分がしっかりある子で学校の枠に入らず、いつもはみだしていました。でも息子は、学校に行かなければ友達に会うチャンスがなかったために行っていました。私も息子の思いをわかってもらうために、毎日のように学校に話しに行っていました。学校側には気持ちにはわかってもらえるけど、学校という枠の中ではむずかしいことが多く、行き詰まり、息子は苦しみました。でも、体調をくずしても、学校に行く選択しかないので無理して学校に行っていました。私は夢中で息子のためにと突き進みましたが、今振り返るとそれは親の自己満足にすぎなかったことに気がつきました。

小学5年生のときにLD（学習障害）・ADHD（注

意欠陥・多動性障害)ではないかと診断されました。そして、ついに中学2年生の2学期になり、受験態勢になって友達と遊ぶ機会が減って、あきらめたように「学校にはもういいかない」と言い出しました。

そしてそこから、自分が自分でいられることへの挑戦を2人で始めました。息子のよい所をのばしてやる場所をさがし始めました。ちがう生き方に目を向けると、ふしぎにいろんな出会いが出てきて、なんであるに学校に行く選択しかないと思ひ込んでいたのかなあと思います。そして4家族が出会い、鳥取でホームスクーリングネットを始めた。私も不安がなくなり息子のよい所をみてやるようになりました。そしてどんどんいろんな人に出会って、へまつくろくろすけの子とも達にも出会えた。お互い子ども達はどんどんひかれあって、鳥取と兵庫を行き来するようになっていった。子ども達はみんな個性的で自分に正直でした。息子もその中で夢中になれるものを見つけ、少しずつ自信を取り戻していきました。

この体験を生かして、自分にあつた環境を子ども達3人ともが選べるようにしたいと思い、家族で話しあ

い、引越しすることになっていきました。下の娘二人はその頃は学校に行っていたし、私も学校を否定する気は毛頭もうとうないですが、ただ一般の学校では限界がある。だから、いろんな人間がいるようにいろんな「学び」を選べたら、こんなに息子は自信をなくさずにいられたと思います。

市川町に引越したあと、しばらくして娘達も学校に行かない選択をし、へまつくろくろすけに通うようになりました。

今は本当に子ども達の思いに添っていつしよに生きているから、無理に力を引き出す必要もなく私も不安ではなくなりました。ただ、寄り添い見守っているだけです。子ども達の持っている力を信じられるからです。3人とも自分を発揮でき、どんどん成長してきています。

鈴木 親が不安じゃないというのが大切です。子どもが親に「ありのままの自分でいいんだよ」と信頼されていれば子どもも安心だし、幸せなことです。まず、親ですよ。

## まわりの人達とはどういふのか。

司会　ご近所との関係はいかがですか？　気になったことなどありますか？

鈴木　はい。既存の学校に行っていないとまわりに言う「え？　不登校なの！」って驚かれるのがつらい。まだ不登校のイメージって、弱いっていうか……。

「がまんが足りない」と言われたりもしました。不登校とは、わがままじゃなくて、自分をしっかりとっているのだと私は思っています。なのに、なかなかそう見てもらえない。子ども達は忍耐力がないのではなく、必要ながまんをしていないだけです。子ども達は自分に必要ながまんはできています。

まわりに流されず親がしっかりと自分をもつこと、親が子ども達を信じてあげることが大切ですね。

後藤（由）　わがままとか言ってくる人に「ちがうよ」と言いたいけど、わかってもらえないことももちろん

ありますね。理解してもらおうとあまり思わないで、子どもが健やかに成長することを第一にやっていくって感じです。

佐々木　息子とはとん学校に行ってから、「行かない」ことを自分で決めたので……ちがう生き方を選んだだけと、わりきってしまいました。学校に行かないほかの親子に出会えたことが支えにもなった。皆でいろんな所に行っていたので人の目も気にならなくなっちゃいました。「学校は？」とよく聞かれましたが、私も子ども達もその時にあわせて答えています。最近「デモクラティック・スクールに行っています」と答えているかな。

後藤（明）　うちは二人ともずっと既存の学校には行っていないし、まわりの人もそれをわかっていないからね。私は坊主なので、人と話すことも多いです。子どもさんを持つ親に「学校に行かないこともひとつの選択肢ですよ。学校に行きたくなくなっても、ちがう方法もある。そういう資料はいくらでもお寺にあるから見にきてください。相談にのりますよ」と話すこともあります。知らない人には知らないのだろうけど、

そんなものあるんだと思うだけでずいぶん気持ちが悪くなる人もいるでしょうから。

子どもから、「新しい選択肢で生きている」と教わりました。そのことを、私もお参りに行ったときに、まわりの人によく話をします。

いろんな目があるのは当たり前だから、楽しく過ごしていたら、「そんなこともあるんか」とまわりにも思ってもらえるしね。

## 既存の学校との関係

佐々木 学校には「学び方は学校とちがうかもしれないけど、こういうふうにやっています」と正直に話しています。以前、熱心な先生が「まっくろくろすけ」を見に来られた。子ども達を見て「やり方がちがうけれど、こんな学び方もあるんですね」と感心され、安心して帰られました。

とにかくこういう学び方で子どもが成長してきてい

ることと、本人が楽しそうにしていることを伝えていきます。

後藤（由） 学校には私達がしっかりと自分の考えをもって話していいたら、理解してもらえました。先生としても子どもものを大事に考えてくれているから、理解して安心してもらえた。不登校と一口に言ってもいろんな形があるからね。先生とは協力関係です。

アメリカではすでにデモクラティック・スクールにも公教育としての認可がおりていますが、日本ではまだです。ですから、みなさん近くの公立学校に学籍をおき進級や卒業証書はその小学校や中学校でもらっています。多様な教育スタイルを法的にも認めていくことが大事ですが、法改正には時間がかかります。ですから、文部科学省も学校も子ども達の不利益にならないようにとしています。だから、親の方もきちんと話していく必要がありますね。



## デモクラティック・スクールでの成長

司会 では、デモクラティック・スクールで育つお子さんから感じることをお話してください。

後藤（由） スクールでは、人と「対話」をどんどんしている。とにかく自分に必要なことは家でもきちつと話してきます。相談したり、話しあったりするように求められます。

反対に私達大人はそんな基本的なことを、生きる中で学んできていないことを知らされました。スクールでの生活を通して、子ども達がいかにコミュニケーション力をつけているか、実感しますね。

（まっくろくろすけ）では家庭よりずっと子ども達の主体性を大事にしてくれているので、親も勉強になる。だから家庭とスクールのいい関係がとれています。

大人になっても対話ができないで苦しむ場合が多いですもんね。

鈴木 自分自身のままで、そして人と会話も交わせるということですね。

佐々木 私より子どものほうが感情をきちつと抑えて話をしてくるから、すごいなあって思うことがよくあります。

鈴木 子どものほうが親より大人ですね。

後藤（由）「あなたは一人前」って扱われるから、大人になるのが早いのかな。一人前に扱われれば一人前になっていくでしょう。あなたはまだ子どもだからって言われていると、いつまでも子どものままでいい。でも、スクールの中では年齢に関係なく対等。その中で自分の範囲を知っていく。だから、自分の領域に入って来られたらいやだって言うし、いきなり相手の領域に入っちゃうことはないと思う。私は大人になるまでそんなこと感じられることがなかったので、息子達からすぐく学ばせてもらった。

サドベリーバレー・スクールでも子ども達がずっとしゃべっていると聞きました。「会話と遊び」は人間が生きるのにとても大切なことです。

既存の学校には会話と遊びは本当に少ない。家でも

それがなかったら、子ども達たいへんだ……。

## 家庭にももたらされる変化

司会 子ども達が民主的な態度を身につけると、家庭ではどんな変化がありますか？

亀井 この頃よく子どもと話すようになりました。すると、私と似ているとしみじみ思います。親子でコミュニケーションができてきた、それが何よりうれしいです。既存の学校は「ああしなさい。こうしなさい」だけど、〈なわて〉には一切それがない。だからか、うれしいことや今日あったことなど自由に感じて成長している。今は親子で比較的わかりあえるようになり、話していても楽しいし、息子も気持ちを聞いてもらえると言っています。

佐々木 兄弟姉妹の間では相手の領域がすぐわかるようになって、会話のキャッチボールができ楽しそう

です。最初は私だけ怒っていることもよくありますが、今は私も楽しくなりました。

## 日常的な親子の問題解決はどうしているの？

後藤（由） 子どもも自己主張するから、こっちの都合の悪いこともいっぱいあります。チャットしながらするゲームがあるでしょ？ 夜遅くからゲームをやったりしている。けっこう大きい子がやっているのだからけど、うちは下の子はまだ11歳なので……。夜遅くまで起きていたいといっても、まだいっしょに寝たいから遅くに親が寝てるところに入ってきたりする。すると、こっちもぐっすり眠れない。息子もまだ成長期だし、私は早く寝てほしい。息子が体調を崩したりしても世話するのは私だからと、私の言い分をとにかく主張します。でも、今彼のすぐくしたいことだから、私も少し譲って週一とか、時を選んでやろうというこ

とになっています。そのおかげでキーボードもブラインドタッチが苦もなくできるようになるし、漢字もだいたい覚えてみたいで驚きました。

「人には自分を育てるという力がある」ことを感じます。その代わり、親の思い通りにはならないけど。

鈴木 それはすごい。体験学習をわざわざしなくても、子どもは楽しいことから学びますね。うちも夜も朝も遅いし。私は「まあ、いいか」って感じです。

後藤（由） 子どものしたいことが、こっちの枠を壊してくることもあります。パソコンにしても親のものだから、子どものしたい時にできないことも当然ある。日常生活において個人の自由は常に誰かの何かとぶつかる。その時に何かを学ぶのがすごい大きなことです。自分の領域と誰かの領域をお互いできるだけ尊重しながら一致点を見つけようとする。それがスクールではちゃんとできている。そういうぶつかりあいが家庭でもあって、家庭の中でも自由って何なのかをお互い模索しています。

亀井 うちはもう大きいから好きなようにさせています。年齢がちがいますから。生活リズムは、ずれたり

反転したりぐちゃぐちゃでした。「もう好きなようにさせたらええわ」と思っていたら、さすがに夜中に起きて一人でご飯を食べるのはさびしいと本人が感じるようになってきた。だんだんそんなことがわかるみたいで、それでリズムを戻してきました。

スクールでは話しあっているんな案を出しますね。お互いに意見を出しあって検討して、みんながいやでないところに落ち着く方法です。へなわて〜では時間がかかってもうよくそういう決め方をしています。

家庭でもそれを取り入れられますよね。人数が多いと大変ですが、親と子二人の間だとやりやすいです。

後藤（由） 実際に家庭でもそれをするといいですね。親のほうが身についてないです。

亀井 私達の頃は親が「ダメ」と言ったらダメ。子ども時代は「しょうがないか」とあきらめていた。だから息子に対しても私のほうは「そうなるはずやんか」みたいな感じ。でも、息子はそうではありません。きちんと話しあおうとします。

## 2

# 日本の教育をとりまくもの

出席者 後藤（由）・佐々木・鈴木・児島

### 80年代フリースクール誕生、 そして21世紀デモクラティック・スクールへと

司会 児島さんは〈まっくろくろすけ〉の保護者でもあり、日本で一番古く始まったフリースクールの一つ「地球学校」の主宰者でもありました。そのあたりのことからいろいろお話をお聞きたいです。

児島 フリースクールといってもいろんな所があります。「地球学校」は「子どもがいかに自分で自分の花を咲かせるか、自分で自分の道を切り開くかという環

境」でした。どんなことも過程を大事にして、すべて学びの一環だと思っていました。ミーティング（ミーティング——84頁を参照）も頻繁にあり、スタッフの給料やトイレットペーパー一つでも会計のミーティングで図る。言い出す勇気がないと予算はもらえない。その日まで「ゝがほしい」とまわりに言っていない。本人がそのミーティングで言わないと代わりに誰かが言ってくれることはない。すべては自分を映す鏡。手を貸してはくれません。そのかわりに自分でできることができる。そのチャンスが常にあります。

もう20年も前の話です。「自分から言えるようにな

る」それが子どもの側に確立されるまで何年もかかった。信頼関係が生まれるまで、ここで自分はこういうことができるのかと何度も自分で大人を試します。その試しにすごい意味がある。今まで、何度も大人に裏切られたか、だまされたか、逆に与えられ過ぎたか、うまくのせられたことが多かった。そういった大人から背負わされていたものをすべて降ろしきるまでは常に「これは本当かな、うそかな？」と、大人を試すことをやり続けていました。

司会 当時の「地球学校」の子達とデモクラティック・スクールの子達とのちがいを何か感じますか？

児島 おもしろいことに、〈まっくろくろすけ〉の子ども達はその大人を試すというのをやる必要がほとんどありません。もともと人と人の信頼関係のもとにつくりあげてきたからです。もちろん来ている子全員じゃないかもしれませんが、うちの子達はまちがいにくそうです。思ったことはハッキリと言います。いいか悪いかとか即座に言います。すぐにそれが言えるのはすごいことです。それが真の民主的な社会だと思います。

実社会はそこまで民主的にはまだ至っていないのではないのでしょうか。子ども達がこれから社会をどう切り開いていくかが問われています。旧来の「どうせあかんわ」というのではなく、蓄えた力を使って「やってみなわからんし、やれるわ」と思える。そのパワーが十分たまってきたら、スクールを出て行こうかとなるわけです。それは退屈というよりはそろそろじっとしていられなくなるからです。なぜって聞かれても答えられないことかもしれないですけど、それが成長の証です。内側から湧いてくるものです。さなぎが蝶になるように、自然の摂理でしょう。ただそれが何になるか本人にはわからないけど、飛び立つという意志です。誰しも自由な空気を吸って自分の中に自分の力を溜め込んだら、その力を使わずにはいられなくなります。

それは大人も喜ぶべきことだと思うのですが、なぜか親が子どもにとってはブレーキになるようなことをしてしまふ。それは今までの古い価値観のせいだと思います。これをやったら危ないだとか、こうなる……とか先に親が答えを得て押しつけてしまふのです。今

までの過去の経験がそれを阻止してしまう。ところが親の望みは「わが子の成長」です。そこをわれわれ大人がよくよく考えなくてはならないと思います。

「地球学校」の頃は親が「子どもが学校に行かなくなったが、どうしよう」と困って電話をしてきました。今はそういう電話はとても減りました。幼い子をもつ親が「自分達に合う学校を探しているのですが……」と電話してくるケースが増えています。親の意識も変わってきている、時代は確実に変化していると感じています。

## 個人を尊重する社会へ

児島 デモクラティック・スクールで「社会性は身につきますか？」とよくたずねられます。まわりが決めたルールにどれだけ適応するか、社会にうまいこと適応していくかが親の心配なのでしょう。自由なことを

やっていたら、つまり好きなことだけしてきらいなこととはしない、そうすると社会からはじき出されるのではないかという心配が頭の中をかけ巡るわけです。

鈴木 学校の先生にも私もそう言われました。

後藤（由） 事実はどうなのかで考えたいですね。社会性が、「集団の中で自分らしく生きながらほかの人とやっていく力」であるとするれば、現実的に表面的には適応していても、自分らしく生きてるといえる人はごく少ないかも。既存の学校で、そういう意味での社会性が身につくのかなというのが正直な気持ちです。

それと社会では同年齢集団っていうのはほとんどない。現実には異年齢集団。学校の学年別の中で、現実社会に通用する社会性がうまく身につくとは思わない。

そういう事実に基づいた見方を親がきちんとしてほしいですね。

児島 国が定義している社会性とは国が意図的に作ったシステムのの中にどれだけ適応するかということですね。じゃ、なんでそういうシステムを作ったのか。

学校にいけなくなると「罪悪感」をもってしまう真面目な親がたくさんいます。国が決めていることには

ちゃんとしたとがわないと、私はずれていると思ひ込む。思い込まれるのかもしれないですが……。

そこから自由になるというのは、つまり国が決めたシステムやルールに縛られないことです。縛られない子ども達が登場してしまうと国は困るので、「登校拒否児」という言葉ができたわけです。僕はその第一号です。小学生の時に学校に行かなくなった時にそう言われました。「登校拒否」という言葉（呪文）で子どもも親も学校から逃げられないようにしてしまつた。「登校選択」と言えば、自由だつたわけです。本当は教育基本法にそう書いてあります。親の義務として「学校に行かせろ」とはどこにも書いてないのです。

### 義務教育って誰のため？

### 国の学校ではなく自分達のスタイルを

鈴木 「義務教育」という言葉も変に感じます。

児島 教育基本法というのは当たり前なことが書いてあります。それを国の一方的な解釈で「学校に行く＝教育を受けている」としてしまつたことがおかしいわけです。彼らが作つた枠の中に入ること、生産性が高まる人材を育てて、当時の大きな会社の終身雇用を活性化するためにどんなテストをし、ランク付けをする。それにみんな乗せられてしまい、それが将来の幸せや安定を決めると言われ教え込まれてきたのです。ほんとうは自分で考えて行動する、それが「自立」と先生は言うし、教育基本法にも謳<sup>うた</sup>つてあるのに、やつてゐることはそうではないのです。

「自分」を持つた人というのは、自分のやり方をやりたくくなります。うちの子は1年生の算数のときに、自分のやり方があるからつて、先生のやり方を拒否したので。すると先生は、「ダメ！ このやり方をしなさい」と言つたそうです。自分の創造性の中から生まれるやり方を認めてもらえない。自分を表現できないのですから、苦しいはずですよ。

でも、苦しいのはどこかで自分を感<sup>かん</sup>じている、つかんでいる子にとつてです。自己をつかんでいない子

は、そうやれと言われたらそうする。するとほめてもらえて、気持ちがよくなる。先生も喜びます。疑うとか、大事な自分の疑問を投げかけるとかを忘れさってしまう、おきざりにしてしまうのです。

鈴木 「登校拒否なの？」と人に言われると、「いいえ、登校拒否じゃなくて行くのをやめた。行かない選択をしている」と言っています。

後藤（由） 「行かない」って選択をしているだけなのに、そういうレッテルをはってくる。社会からの圧力なんだけど、家庭でもそれを受け入れてしまうと子どもは苦しくなりますね。せめて親がそういう見方をしない姿勢があればいいですね。

## 親と子の権利を取り戻そう

児島 だからデモクラティック・スクールが生まれてくるのは本当に必要ことです。デモクラティック・ス

クールのほうが、公立の学校よりはるかに、おおやけ、だと思う。

公立の学校は国家の学校、すなわち国が運営管轄している学校、場です。でも、〇おおやけ、とは僕ら（公衆）のことであって、国のある一部の人達が仕組んだアイディアを、〇公、とはよべないと思います。一人ひとりが生かされて、自分の表現ができる学びの場のことを「公」教育というはずです。

ところが、自殺する子もいればいへんなことをしてしまう子もいます。一人でもいればそれは何かがおかしいということなのに、早く大勢の人がそのことに気付いて、不安から脱した方がいいですね。

後藤（由） 国と、一人ひとりということだけじゃなく、大人と子ども、親と子の関係でも、相手を管理したりコントロールしたりしようとする。同じ構造を家庭の中でも作っていると思います。

子どもが学校に行かなくなり、学校の教育のあり方がおかしいと見えてきた。その次にやっぱり自分自身もおかしいなということを気づかせてもらった。

結局自分でものを考えて行動できる人間っていろいろ



は、コントロールしたいほうにとつては困る存在なんだけど、親子という個人レベルの関係なら、ちがう方法があることをどんどん知って、変えていくことができました。

私の場合はさまざまな情報や、そういうふうにいる人やそう育った子ども達に出会うことで知ることができた。知ることができれば個人のレベルではなくに変わることができる。

児島 とても大事な表現をさせてもらうと、もともと学校というものがなかったら、当然先生もいないわけでしょう？ 学校は人の歴史からみたら最後のところになちよつと出てきた形態。それがなくても人間はズツと生きてきて、それがなくても大丈夫なわけです。

学校をそぎ落とすと何が残るかといえば、「親権」。親の権利がどんどん奪われています。6歳になったら学校に行かせなきゃと思うこと自体が、そう決められているからですよ。それで、親が「うちの子はこういう子なので、点数がつけられるわけじゃないでしょう」と、もし一言でも言えば先生は困ってしまう。でも、

そういうことを親が言えなくなってしまうのはなぜでしょう。

あるべきものをもう一度取り戻さなくてはならない。親としてあるべき権限があるはず。それを今、デモクラティック・スクールでは、もう一回自分の力呼び起こして、子どもは自分の力を取り戻し、親も自分の力を取り戻し、家庭もまたその力を取り戻しているのです。

後藤（由） 子どもが生まれた時に病院で当たり前のように母子別室にされてしまいました。子どもが帰ってきたとき、取り戻したという気がしました。こどもが学校へ行くのを止めて、親子のペースを取り戻した時もそんな気がしました。どちらも奪われている姿がそのときはわからなくて、本来の姿を取り戻した時にほつとして、取り戻したという感じがしました。個人レベルでは取り戻すということはできるでしょう。

児島 親はよっぽどの確信を持つてなければぐらついでしまうでしょう。

後藤（由） 自分が恐怖心を持っていたら、たくさんの方がしていることがたとえまちがっていてもその中

にすることに安心を求めてしまうのではないでしょうか。それが親にとっての一つのハードルとなる。一人ではなかなかそのハードルは越えにくいですね。

### 「学習障害」って本当に問題なの？

鈴木 「学習障害」というのもおかしく思います。デモクラティック・スクールではそんなことは問題にならないですね。

佐々木 ええ。それぞれが好きなことを追求することを許されている場なので、どんなその子の持っている力が発揮されてきます。そういったレッテルを子どもにはする必要がない。そしてどの子ども「民主的に行われる自治」の中で一人ひとりが協調性と責任感をもつ人へと成長していきます。息子も自分に障害児というレッテルをはられたくない、ありのままの自分を認めてほしかったのです。そうでなければ息子自身を否定

することになってしまおうと私自身も気づきました。

障害だろうが何だろうが、子ども達は皆ありのままの自分に接してほしいのはありませんか。

児島 デモクラティック・スクールの自由に自由の中で育つことができれば、クリエイティブに生きることができ、好きでやっていることが、結果的にみんなの役に立つような仕事につながります。誰かが指示を出して、それをやらされているのではそうはいきません。そこがもう決定的にちがうのです。「主導権」を、既存の学校では最初に子どもからうばってしまっているわけです。自分らしく成長できなくしています。

### 教育基本法って？

後藤（由） 最近、教育基本法が変えられましたね。なんか今の子どもが悪いのは教育基本法のせいだと言って変えました。でもそうではなくて、教育基本法

をきちんと守ってないから、教育の質が悪くなっているのだと思います。子どもは何にも悪くなっていない。戦前は家族がしっかりしていて人情もあつてよかったというけれど、戦争をしてしまった社会です。多くの人が犠牲になった教育を反省してできた教育基本法の精神はまだ実現していません。

民主主義だってそう。まだ本当の民主主義など実現どころかイメージさえ私達は持つことができないでいる。自由といったらわがまま、民主主義といったら多数決くらいの感覚しかない。多数決なんて少数を封じ込めてしまう数の暴力とも言えますから、本当の民主主義とはちがいますね。本当の意味での民主主義はまだまったく実現していないし、私達はまだ経験していません。それなのにこの頃民主主義を否定する人がいるけど、あぶないなあ、またそれで大事なものを失うのではないかって心配です。

主義主張ではなく、平和な調和した暮らしをどう作るかという民主主義の原点を取り戻していきたいですね。



2006年 保護者座談会

# 3

## デモクラティック・スクールで育つ子ども達

出席者 萩(秀)・萩(育)・後藤(由)・佐々木・鈴木・児島

### 自由の空気の中で育つ子ども達

司会 スクールで育つ子ども達をどのように感じておられますか？

鈴木 私はときどき〈宙<sup>そら</sup>〉に行きますが、とても楽しいです。気持ちがいい。のびのびした空気が漂<sup>ただよ</sup>っている。

佐々木 そうですね。そういう雰囲気がデモクラティック・スクールにはありますね。会話していても子ども相手という感じじゃない。話を聞いてくれる

し、話ができる。年齢のギャップが感じられないのもふしぎなだけで。

後藤(由) そういう空気の中で「親という役割を離れて自分を取り戻す」、そういう時間があったのは私にはとてもよかったです。親も子どもと同じ圧力の中で生きているから、その圧力から少し離れて自分を見つめるいい機会になった。平和とか調和とかをはじめて感じるような、そこから何かがスタートするみたいなベースの中で自分の世界を日々作り出していく、そういう生き方があらわれ、不安もなくなっていきました。

鈴木 結局、「ありのままの自分でいられるか」とい

うことですね。既存の学校に行くと、「がんばらなくっちゃ」というムードにはいつてしまいがちです。親でもそういう圧力を感じます。

後藤（由） そういうものから私達親も解放されて、自分らしい生き方を選ぶようになり、生き生き青春していますね。生き生きと自分を生きている子ども達のこととは、あつと驚くようなことばかりですね。

## 自治の中で育つ責任について

司会 「子ども達が自分達でスクールを自治していく」、それもここの特徴ですね。

後藤（由） 自治、つまりみんなで納得する点をみつけるというミーティングは全体に対する自分の責任を育てますね。そういったミーティングを私は（まっくらくろすけ）などを経験して初めて知りました。私同様多くの人は知っているようで、知らないですね。で

も本当に知れば誰もが使える方法だし、いろんな問題を解決することができる。ぜひ公立学校や子ども会などでも取り入れてみたいと思います。私達自身が育ってきた中では、責任感が本当の意味では育ってきいていなかったと、今になってわかる感じです。

佐々木 ミーティングの妻<sup>す</sup>さを息子のことで、実感しました。自分でやりたいと決めたことだと、どんなにハードルがあっても乗り越える力が発揮されるのだと知らされました。それは、ミーティングで納得がいくまで話しあいをもたれるからです。自分で決めたことを実現するためには自分と向きあわないとできないことと、そして相手のことも理解しないとできないことなのです。それで息子はやりたいことを実現するために自分の苦手な所を皆に話して手助けしてほしいと頼んだのです。あのプライドの高い息子がと驚きました。このことがあってから、私は息子の力を信じて見守れるようになりました。どの子もいろんなことを実際に体験し、自分で考え、行動する力があります。自由にしてはダメと思われがちですが、自分で決めたことはすべて自分にかえってきて、自分で責任をとっていく

ということになるのです。大人は失敗を恐れず子どもを信頼してやるのが大切、それがその子自身の本当の力になっていくのだということを実感しています。人間にとって人とかかわりが必要です。そのためにLD・ADHDの子も含め、個性の強い子どもが大切にされる場所が必要です。

**荻（育）** 集団の中で物を決めていくことなど、とてもいい学びになっています。ほかの人から押しつけられたものでなく、自分達で話しあい決めたことなので、とてもよく守り、責任をもつてやっています。それはすごいことだと思います。

**後藤（由）** 小さかったり、入ったばかりの子などは「決まったら絶対しなきゃいけない、いやでもやる」みたいに縛られていく部分があるかもね。反対に、全然縛られない子もいるし。その中でそれぞれ必要な経験をしていく……。

〈まっくろくろすけ〉でも同じようなことがあります。ある子がミーティングで決めたことで苦しくなった。実はしたくないことをしなくてはいけない状態になったから。そういう時、途中でいやになっても

やり通すのも一つの責任の取り方かもしれない。でも、そのことをもう一度皆に相談して変えていくということもできますね。

**荻（育）** まだ発言が上手にできないとき、強く言える子に流されてしまうこともある。それで成長していくでしょうけどね。

**後藤（由）** どうしても矛盾する二つのものがある。自分でやると言った責任が一つ。でも人間は変化する、だから当然決めたことも変えられるよという柔軟性も大事なこと。その二つをどうするか？ 子どもがたくましくなっていけば、それらをコントロールしていくでしょう。

責任とは、「他者に対する責任」と「自分自身に対する責任」があると思います。一般社会では、他者に対する責任……人に迷惑をかけることが「責任をとる」という意味が強いけど、自分自身に対する責任もある。自分にうそをつかない責任もあるわけです。

その二つは方向がちがうから自分の中でどう折りあひをつけていくかが大切。どっちに縛られすぎてもしんどいですからね。

司会 全体の中でものを決めていくとき、自分の思ったのとちがったふうに決まってしまうこともありますね。そこでどうしていくか、学びですね。家族の間や個人と個人の間なら、ぶつぶつ言ったことから会話が生まれ、決めなおすことになったりもしますね。でも集団の中ではきちんとした場で話題にださないといけない。自分で動かなければならない。

佐々木 責任のある言動をするためには、自分の本当の気持ち・ペースや許容量など自分自身のことをよくわかることも必要ですね。いろんな経験をして、その折りあいを理解していくのだろうね。

荻(育) 〈宙〉でも言ったことやしたことに対しての責任追及は厳しいところがあるかもしれませんがね。大人・子ども分け隔て<sup>へだ</sup>なしという強みがあるから、子どもの方が筋の通ったことを、とことん粘って発言する。大人は「まあそのへんで」とのむ所を、延々と発言が続ぎ、一つのテーマがなかなか決まらないことがありますね。妥協しない。

でも、ミーティングのやりかたもその中での発言もしっかりしてきています。最近は物事を自分達のこと

として発言し取り組んでいます。「これを今日中に決めておかないと、明日〈宙〉が開けられない」とか、意識をもっています。

でも、最初からデモクラティックが身についている子なんていませんよね。

佐々木 何日も何もせずにじっと座っているだけの子がいたけど、ある日きっかけを自分でつかんでパァーと溶け込んでいった。今では積極的にミーティングでもはっきり自分の意見を言っています。大きく成長しているなあとうれしくなります。

## スクールを基盤に広がる人、深い友人

荻(育) デモクラティック・スクールでの友達ほんとうに独特なものがあると思います。15歳ぐらいって「友達がほしい、世界を広げたい」という年代でしょ？ ただ遊ぶだけじゃなくって、しゃべって生き

たいっていう年齢。そんなときに上の息子は〈宙〉と〈まっくろくろすけ〉を歩き来しながらいい友達ができた。競争や点数・結果でそれぞれを比べられる今の既存の学校では、無意識に「がんばれ」と「いつまでに」で迫られるじゃないですか。そういうしがらみなしに育っているデモクラティック・スクールの子どものスケールの大きさに触れて、息子も何か変わっていったようです。お互いを認めあっている実感があつたのではないかなあ。

後藤（由） 既存の学校だったら、たくさん友達ができるみたいに思いがちですが、多くの人数がいるから多くの本当の友達ができるかといったら、私は疑問に感じます。

反対に一人の人でも深く出会えば、たとえ遠くてもつながっていく。きっと将来的にそういう人とはずつとやりとりしながら続いていくだろうし……。そうして、不安に思わなくても自分に必要な出会いとは出会っていくのだとわかると、本当に安心してくらしていけます。

荻（育） 〈宙〉は少人数かもしれないけど、その分深

く一生つきあえる友達ができています。本当に自分の心の中をいえる友達が私には何人できてるかなと思うのに、息子は出会う人数が少ない環境にしながらも、深い友達ができた。「幸せなことだね」と子どもと話しています。

後藤（由） ここでは各家庭で同じことをベースにしている安心感があるから、子どもが「泊まりにいくわ」と言ったら「いつてらっしゃい」と答えるだけ。子ども達もその家の人が気持ちよく過ごせるように自然に振舞える子達ですしね。

荻（育） 価値観がいつしよだから安心して「何日でもいてね」って気持ちになれます。生きていく上で、人として何が大事かということを自然に考えられるようになり、人を傷つけないことなんかを自然に覚えていっています。

後藤（由） 一番大事な部分を学ぶところかもしれないね。これだけあれば生きていけるってことを。そういう環境にいられるのは恵まれたことですね。なかなか今の暮らしで普通に生きていると学びにくくなっているのでしょう。



## 親もいっしょにつくる デモクラティック・スクール

司会 「保護者もスクールの大切なことに対していっしょに決めていける」というのも、保護者にとって安心な面ではないでしょうか？

後藤（由） ええ。親もスクールの一員であり、総会（総会——96頁を参照）では発言権があるので、何かあればデモクラティックに言っていける。そして子ども達と話してあげればいいのです。

年間の予算もいっしょに決めていきます。たとえば、親の立場からすると子どもの人数が増えて、学費が安くなると助かりますよね。それを予算について決める総会で親が子ども達に言っていけば、子どももそれを聞いて考えていきますよね。

司会 〈宙〉でも総会で子どもの出した予算案で学費が値上げとなっていたけど、親のほうから「無理」とでた。そしたら「親の予算案もだしてみて」と子ども

から声が上がったりしました。

荻（育） 働いている親も多いので、親が話しあいに出来る日を探すのもむずかしく、親同士面識の少ないときもあります。

先のことまで見通して考える親もいれば、今年一年過ごしてみないと先のことは考えにくいという親もあります。親の意識が変わらないと運営がむずかしいこともあります。

でも、大切なことは子どもが「選んでいく力、生きていく力を養っていける場がある」ということです。息子もその力がついたので、自分の力で行きたい高校・大学へと進学しています。

後藤（由） もちろん意見がなく、参加する人に任せますという親もいてもいいし、どう係わるかはそれぞれですが、親がスクールに民主的にかかわり意見を言うのはスクールをよくすることにもなると思いますかね？ 親も勉強になるし。

佐々木 ええ。親の意見を子ども達にどう伝えていくかは親も毎年の総会などを通じて学んできていますね。

後藤(由) 最初からああしてこうしてではなく「親はこういう思いをして困っているんだけど、どうしたらいい？」と、子ども達と問題を共有するというやり方ですね。そういう事の運び方は、私も学んだことです。

萩(育) 下の息子は〈宙〉の代表をしたり、運営にもかかわって積極的にデモクラティック・スクールの意味を考えています。もっと大きなデモクラティック・スクールを体験したいという志も持っています。ですが、スクールのことに私が口をだすのはいやなようです。

佐々木 親に直接関わりのないことに口を出してくるのは、うちの子ども達もいやがりますね。

後藤(由) 子ども達の自由に使えると決まった部分のお金については、親は何に使おうが口は出しませんし、どうとも思いません。

口をだすのは外枠のことです。スクールの予算全体の配分などについて決めるときに親の意見も言っています。

ただ危険や法律に配慮することは言うまでもありません。

せんが。あと社会・地域と関係することなどは親にも責任があるかもしれませんね。その点については今の段階ではまだ親の担うものもあると思います。

## 卒業生について

司会 スクールで、すでに大きくなり卒業されたお子さんの様子について、お聞かせください。

萩(秀) 息子二人が〈宙〉でお世話になってきました。上の息子は3年前に卒業しました。下は今も通っています。スクールと息子達の関わりを見ると、人間形成において何かを収得している、既存の学校では得られないことを学んでいるなど日頃感じています。

萩(育) 既存の学校に行っていたら、自己主張したとしても親向け・先生向けに受けのいいものをしやすいですね。本当の自然な自己主張は〈宙〉だからでき

るようになったと思います。

児島　うちの場合、子ども達が「そのまんまで育つ」ということだけを大事にしてきました。だから学校に行く行かないとか、デモクラティック・スクールに入る入らないとかいうより、まずその子自身がそのままの自分で生きていくということです。

彼らの人生の道の上に存在していたのが、まず「親」で、その次に「友達」、その次に集団である「まっくろくろすけ」でした。どれもこれも彼らにとつてのエネルギー源であり栄養ですね。それを吸って大きくなってきています。たぶん彼等の人生からみたら、自分にとって必要なもの、その時なくてはならないものだったと思います。

既存の学校にも少し行き、「この味は僕の味ではない」と宣言できたのがよかったです。それは、彼らがあるのままでいられる空気が家の中にあつたから、何を言ってもよかつたからそうできたのです。

子ども達がしているのは「自己主張」というより、むしろ「自己表現」がびつたりだと思っています。人がどう思うかではなく、個性が生きて表現しているといえ

ます。自己表現をうけとめてくれる親やその仲間、その集合体であるデモクラティックなコミュニティ（共同体Ⅱ家族）としてのスクールがあることによって、彼らはより一層豊かな表現やクリエイティブな個性を発揮できています。たぶん家ではかぎられていて、外で刺激のある仲間、刺激のあるゲストなどに出会つたおかげで、ますます彼らの花を咲かせ始めているようです。

生まれた時から自分の世界を広げているとも言えます。もし比べられなかつたら、そのまま生きていきます。そうしたら、人と自分がちがつても、それが自然で、それがよいとか悪いとか一切なく、ただ「こういうもんだ」……それだけです。デモクラティック・スクールのようにそういうつきあいやかかわり方が続けられたら、みんな楽で幸せですね。

「まっくろくろすけ」を卒業した子ども達をみていたら、彼らの成長は、自分が自分で吸収したもので育ってきた、そういう誰からも強制されない成長です。「やっぱりこれでよかつた!」とはっきりと確信が持てましたね。

卒業しても、子ども達のそのまんまの勢いや流れやリズムは、続いていくだろうと思います。

荻（育） 上の子は〈宙〉を卒業後、単位制の高校に通っています。でも、その生徒というカラーではなく、オンリーワンのカラー、自分のチョイスした時間の中で動いている。それは「今何かを選ばない」と強制されているのではなく、自然に自分が選びたいとに選んでいます。

デモクラティック・スクールで育った友達も自然に彼が選んでいることにエールを送るという感じで、お互いにプレッシャーを感じるといったことがない。既存の学校のように同級生に競争心を感じるというようなものではないですね。

私の17〜18歳の頃と比べたら、彼らは冷静に一つ一つのことを選んでいて、すごく多様な生き方をしているなあ。

後藤（由） 息子はスクールに行ったことで、他者というものにはしっかり出会えて、自分をコントロールするという経験を積んだと思います。

スクールでは皆が一人ひとりを尊重した状態の中

で、お互いに率直に意見を言いあうから、安心ですね。たとえば、うちの子が何か言い張っても、それがいやな子がいればきつちりといやと返してくるから、ちゃんとお互いコントロールしながら過ごしていくことになる。（まっくろくろすけ）的な人間関係の中では、はじめは起きにくいし、起きても解決していくシステムがある。それはものすごく安心です。

つまり、個人がいかに尊重されているかですね。

## 実社会に巣立ってから

司会 デモクラティック・スクールで育ったという人が日本ではまだ数少ないので「今の日本の中では受け入れられるのかなあ」と思う人もいます。将来そのあたりで壁にぶつかったときどうするのでしょうか。

荻（秀） 上の子が〈宙〉へ行き出した時、半信半疑

な所があつたし、どうなるのかなと一番気がかりでした。

でも、〈宙〉のスタートとともに人の輪が広がってきて、その人の輪の中で自分の好きなことを見つけています。息子からもその方向で行きたいという意思表示があつたので……。最終的にはそれで生活していけたらいいのですが、先のことはわからないので「今やりたいのであれば、とことんやって、そのかわり中途半端なことはやるなよ。やるなら徹底的にやれ」と話しています。

そういうとことんやっていけるものが見つかれば、そこから道が開けてくるのかなあ……。自分が集中してやれることから道が開ける。強制されるものではなく、自分で発見していくものですね。それがデモクラティクの到達地点かな。

児島 それがしたくてしている姿は魅力的で、まわりが放っておきません。そんな魅力的な子ども達が増えてきました。そのためには、よくわかった大人、サポートする大人が必要です。親に限らず、いろんな人がいて、ネットワークの中でそういった子ども達が

育っています。

僕も子ども達を見ていると、驚くべき発見があり刺激を受けます。新しい世代が生きている、いろんな場面での可能性がものすごく見えます。「エー、こんなズボンにこんなデザインするのー」みたいな……奇想天外！ 新世界！ といった感じですよ。彼らには未来への可能性がすごくあるなあと思い、本当にうれいんです。

「彼らが自分の夢を実現していくのは、ごく自然なことだ」という感覚を、常にいっしょにしているので僕は感じられます。新しいことへのチャレンジを、子ども達は日々しています。

人生何が起こるかまったくわからないけど、彼らはそれをそのまんま、あせることなく、ありのままのリズムで受け入れています。

今、世の中では経済や戦争などといったマイナスの方向へ引き込まれることが多いです。逆にそういう時だからこそ、一人の子どもが光った時、可能性を見せた時、そのチャンスだと思っています。

それをキャンドルに例えると、光を放つ子がいる。

その子は、幸せだから火を分けてあげるのを全く惜しまない、苦にならない。むしろ来てくれた人に喜んで分ける。幸せは分けても減らないからです。相手にも点くけど、自分の光も消えない。そうしてどんどん分灯していった時、光の空間・世界になっていくのでしょう。こういう「分けあい」こそが奪いあいのない社会をつくっていくのでしょうか。

後藤（由） 学歴や免許などをたくさん持つていても、途中しんどくなつてやめる状況に追い込まれている人をけっこう見かけます。これから子ども達は少なくなり、お年寄りが多くなる状態では、元気であれば絶対何か仕事はあるし、生きていけるでしょう。

荻（秀） やらされているというのはマイナスで、元気を奪ってしまうのですね。人間一番モチベーションがあがっている時は、自分が好きなことをやっている時。その時はものすごいパワーがでているね。

佐々木 何にぶつかってもめげないたくましい子が育っていると感じます。



## おわりに

ここに初めて、日本のデモクラティック・スクールについての本が誕生しました。

デモクラティック・スクールで育つ子ども達の生き生きとした息づかいが伝わったでしょうか？

安心・信頼できる学校コミュニティの中で日々ありのままの自分を表現して生きる子ども達。自尊心と謙虚さを持ちあわせる子ども達。公平さ、思いやりの心とそれを実現していくための機知にとんだ工夫と知恵。そんな子ども達の姿を想い浮かべていただけたでしょうか？

この本で紹介されている3校は日本のデモクラティック・スクールの草分けです。

「日本にもあんな所があったらいいのに」とうらやましがっているだけでは、何も事態は変わりません。「ないのなら、他の誰でもない自分がするんだ」と、勇気をもって、初めの一步を踏み出した人達がつくったスクールです。

1997年、私がデモクラティック・スクールをつくろうと〈まっくろくろすけ〉を始めた時、他

に取り組んでいる人を探しましたが一人も出会えませんでした。半ばあきらめて、こつこつと日々自分達ででき得る最大のことを真剣に楽しく、心をこめてやっていると、いつの間にか同じ志をもつ若者が訪ねてきました。そうして、〈宙<sup>そら</sup>〉〈なわて〉とともに、日本でもデモクラティック・スクールは可能なこと、必要なこと、存在していることを発信し始めました。今では日本各地から、同じスタイルの学校をつくりたいと、見学や研修に毎年来訪者があるほどになりました。

今後デモクラティック・スクールの輪はどんどん広がっていく予感がします。というのは従来の教育がますます行き詰まりを見せており、「子どもが健やかに育ち、心やさしくかつ責任のある大人になるための教育とはどういったものか」を多くの人々が真剣に模索し、何かを待つのではなく、自分で動き出す人が増えているからです。

デモクラティック・スクールをはじめするのに必要なことはただ一つ。「民主的に生きる」ということを大切に考え続けることです。

それは、一人ひとりの人権を守り互いを尊重すること、全体のことは民主的に治めることなど、ごく普通のことでありながら、現実の社会ではまだまだきちんと実現できていないことです。

だからこそデモクラティック・スクールは、真の成長の場、かけがえのない学びの場なのです。子ども達はここで身につけたことを大人になっても忘れず生かしていくでしょう。大人が解決できない問題が山積みになっているこの世の中を、自分達の力と知恵で、平和で持続可能な暮らしへと一歩ずつ歩みをすすめていくのでしょうか。



この本を読んで共感してくださる方はぜひ最初の一步を踏み出してください。

自分のまわりで人を集めて、デモクラティック・スクールをスタートするのもすばらしいし、またこの3校に新しい仲間として加わってもらうのも大歓迎です。デモクラティック・スクールは少人数でも大人数でもかまいません。生き方そのものだからです。

また、直接係わらない方々にも多様な教育の一つとしてのデモクラティック・スクールの重要性をご理解いただき、さまざまな形で応援していただきたいと思います。というのは、新しい多様な教育スタイルを選択する人が増加している一方で、日本では法的にきちんとそれらを認め、支援していくことが遅れているからです。この状況を改善していくためには、まずより多くの方々に、私達のことを知ってもらい、共感を得ることが必要と思っています。そのためにもこれからも続けてデモクラティック・スクールについてお伝えしていくつもりです。

そうして、デモクラティック・スクールの子ども達から感じたこと、学んだことを、ご自分の家庭で、職場で、地域で活かしていただけたら大変うれしいです。

デモクラティック・スクールを考える会 黒田 喜美

## デモクラティック・スクールを考える会

連絡先 〒679-2324 兵庫県神崎郡市川町坂戸592  
デモクラティック・スクールまっくろくろすけ内  
TEL/FAX 0790-26-1129

### 編集委員

黒田喜美（代表編者） 今川将大 倉谷明伸 兄島いのり  
佐々木真佐恵 佐々木麗子 寺本優満子 永井美貴男  
山田耕平

### 執筆・翻訳協力

兄島一裕 妹尾由仁子 高岡亜衣 ダニエル・グリーンバーク  
本田健 ミムジー・サドフスキー

### 写真協力

荻大介 北田真奈美 木下歌子 倉谷明伸 酒井正実  
中橋朋子 松田翔太

## 自分を生きる学校

いま芽吹く日本のデモクラティック・スクール

2008年6月30日 第1刷発行

定 価 1,800円（本体1,714円＋消費税）

編 者 デモクラティック・スクールを考える会

発行者 山崎亮一

発行所 せせらぎ出版

〒530-0043 大阪市北区天満2-1-19 高島ビル2階

TEL. 06-6357-6916 FAX. 06-6357-9279

郵便振替 00950-7-319527

印刷・製本所 城東印刷株式会社

装丁 上野かおる DTP協力 大西昇子

©2008 ISBN978-4-88416-173-6

せせらぎ出版ホームページ <http://www.seseragi-s.com>

メール [info@seseragi-s.com](mailto:info@seseragi-s.com)



この本をそのまま読むことが困難な方のために、営利を目的とする場合を除き、「録音図書」「拡大写本」等の読書代替物への媒体変換を行うことは自由です。製作の後は出版社へご連絡ください。そのために出版社からテキストデータ提供協力もできます。



9784884161736



1920037017149

ISBN978-4-88416-173-6

C0037 ¥1714E

定価1800円(本体1714円+税)



## サドベリーバレー・スクールからのメッセージ

(SINCE 1968 / アメリカ)

「大多数の子ども達が通っている学校とはまったく違う学校を始める」ということに、  
どれだけの勇気と献身が必要になってくるか想像できるでしょうか。  
(日本での取り組みに)私達も非常にわくわくしてうれしい限りです。

D. グリンバーク (創始者) / M. サドフスキー (現代表)

# もっと読む

●電子本（PDF版、税込1296円）を購入する